

主 論 文 要 旨

論文提出者氏名：山田 祐揮

専攻分野：高度臨床医育成コース（総合診療）

指導教授：大平 善之

主論文の題目：

日本の臨床研修医が若手指導医を最も信頼することと心理的安全性との関連

共著者：

廣瀬 雅宣、片山 皓太、井上 陽子、本橋 伊織、家
研也、奥瀬 千晃、大平 善之

緒言

心理的安全性とは、対人関係においてリスクを取る際に「このチームは安心だ」と感じられる状態を指し、医療現場においては患者安全や職員のバーンアウト予防に深く関わる重要な概念である。特に臨床研修医（以下、研修医）は精神的負担が大きく、心理的安全性の確保が重要とされるが、研修医の心理的安全性における若手指導医（卒後3～6年目の医師）の役割に関する研究はこれまでなかった。本研究では、若手指導医との関係が研修医の心理的安全性に影響を及ぼすかどうかを検討した。

方法・対象

2024 年 7 月から 11 月にかけて、日本の基幹型臨床研修病院に在籍する研修医に対して Google フォームを用いた質問紙調査を実施した。質問紙に回答し、かつ研究利用の同意が得られた研修医を本研究の対象とした。質問紙に回答がなかったもの、及び調査結果の研究利用に同意しなかったものは除外した。主要評価項目は、0' Donovan の心理的安全性尺度（日本語版）による 19 項目の平均値とした。副次評価項目としては、0' Donovan の心理的安全性尺度の 3 カテゴリー（チームリーダーに関する項目、同僚との関係性、チームの雰囲気）の平均値を用いた。考えられる交絡因子として、研修病院の因子（研修医の人数、三次救急医療機関か、救急車搬送台数、若手指導医と研修医が同室か、研修医向け勉強会の開催頻度）、研修医の因子（研修医の性別、月あたりの当直回数、残業時間）を収集した。連続変数は t 検定、名義変数はカイ二乗検定あるいは Fisher の正確確率検定を用いて解析した。また、若手指導医と研修医の心理的安全性との関連についての検討は、病院毎に若手指導医がクラスタリングされていると仮定したマルチレベル解析を実施した。

なお本研究は、聖マリアンナ医科大学生命倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号：第 6516 号)。

結果

34 の基幹型臨床研修病院から協力が得られ、在籍する研修医 881 名に対して Google フォームを用いた質問紙を配布した。その結果、191 名（21.7%）から質問紙への回答ならびに研究利用の同意が得られた。

若手指導医を最も信頼している研修医は全体の 42.9%であった。心理的安全性の平均点は 4.2 点（7 点満点中）と、他の医療職よりやや低めの点数を示した。さらに、若手指導医を最も信頼することと心理的安全性との間に有意な関連はみられなかった（調整後回帰係数=0.1, 95%CI -0.30-0.42）。副次評価項目においても、チームリーダー、同

僚、チーム雰囲気のすべてにおいて有意差はみられなかった。

考察

本研究に参加した研修医の心理的安全性は他の医療従事者や医師全般と比較して低い可能性がある。研修医は抑うつ状態・バーンアウトに陥る可能性が高い集団として知られており、研修医のメンタルヘルスの向上や研修中断の予防に心理的安全性の確保は急務であると考えられる。

また、若手指導医の存在が心理的安全性に直接的な影響を与えていない可能性が示された。その理由として、①用いた尺度がチームリーダーを想定したもので若手指導医の評価には適さなかった、②「信頼」という単一項目が多様な意味を含んでいた、③若手指導医が心理的安全性の重要性やメンタリング手法を十分理解・実践できていない可能性が挙げられた。

若手指導医は研修医と学年や年齢が近い一方で、経験や知識がわずかに上回るという near-peer mentor に近似した特徴を持つ。加えて、若手指導医は空間的・認知的近接性から心理的安全性を高める役割が期待されている。一方、日本では若手指導医が教育・学習理論や方法論を学ぶ機会やプログラム（例：Residents-as-Teachers フェローシップ）が十分に普及していないことも指摘されている。研修医との空間的・認知的近接性に優れた若手指導医が積極的なコミュニケーション、信頼関係の構築、効果的なフィードバックを学ぶことは、研修医の心理的安全性の向上に寄与する可能性がある。今後は、若手指導医の教育やメンタリングスキルの向上を図る介入、ならびに心理的安全性や信頼関係を多面的・構造的に評価する尺度の開発が必要である。

結論

日本の研修医は他の医療職と比べて心理的安全性が低い可能性がある。研修医のメンタルヘルスや研修中断防止の観点からも、心理的安全性の確保・向上に向けた取り組みが急務である。また、若手指導医との信頼関係が心理的安全性と有意に関連するとは限らないことが本研究から明らかとなった。今後は、若手指導医の育成や信頼関係の質を高める取り組みが必要とされる。